



特集 広島G7サミットと核廃絶

2023年5月19日から21日、広島で第49回先進国首脳会議（G7サミット）が開催されました。ロシアによるウクライナ侵攻（ロシアーウクライナ戦争）から1年が経ち、核兵器使用が危ぶまれるなか、被爆地広島での開催に、私たちの関心と期待は、おのずとロシアーウクライナ戦争の終結と核廃絶に集まりました。しかし果たしてその結果は、どうだったのでしょうか。

ビジョンなき「広島ビジョン」：G7広島サミットと核兵器廃絶

■ 高橋博子（奈良大学）

2020年2月17日、ワシントンとリンカーンの誕生日を記念した「大統領の日」(Presidential Day) に、ワシントンDCのスミソニアン群の一つ、

アメリカ歴史博物館を訪れた。そこでは、“Price of Freedom: Americans at War”（自由の代償：アメリカ人と戦争）という常設展がある。

2001年9月11日の同時多発テロ後にできた、アメリカがいかに戦争によって自由を勝ち得てきたという趣旨の展示である。

原爆や戦後の核開発競争についても、基本的に正当化した展示で、広島 of 廃墟の光景や原爆や核実験のきのこ雲を強調した展示となっている。核兵器が人間にもたらした「悲惨」ではなく、その「威力」を誇示する展示といえる。アメリカではいまだに、広島・長崎で何が起こり、放射線の影響を含めて人々にその後何が起こったのかについては、「軍事機密情報」なのである。

2023年5月19日から21日にかけて広島でG7サミットが開催された。初日の5月19日、G7に参加する首脳陣は、その「軍事機密情報」が展示されている広島平和記念資料館を訪問した。しかし、その首脳陣が見た内容は「軍事機密」扱いとされ、基本的には報道されなかった。ただ何時に誰が訪問したのかについて『中国新聞』は次のように報道した。

午前10時半ごろ、雨が続く公園に最初に到着したのは、欧州連合（EU）のフォンデアライエン欧州委員長だった。資料館の東館前では、岸田文雄首相が笑顔で出迎えた。続いて各国首脳が次々と降り立ち、順番に館内へ。同11時20分ごろ、最後に着いたバイデン米大統領が、岸田氏と共に館内に足を踏み入れた。

白いシートで窓が目張りされた館内の様子は外からうかがえない。正午過ぎ、首脳たち9人は入館時と同じ東館から出てきた。見学時間は約40分間。バイデン氏は隣を歩く岸田氏の肩にそっと手を置いた。

（『中国新聞』5月19日）

広島・長崎の人々に何が起こったかについていまだに「軍事機密扱い」をしている国の大統領は、最短の40分だとのことである。オバマ大統領の10分の訪問よりはやや長い、フォンデアライエン欧州委員長と比べれば、50分も違う。

この「軍事機密情報」をリークしたのがイギ

リスのスナク首相だ。『朝日新聞』は「先進7カ国首脳会議（G7サミット）に出席するため、広島市を訪れていた英国スナク首相は21日、中区で記者会見をした。原爆資料館で、子どもたちの遺品の三輪車や学生服を見たときと明かし「ここで起こったことを忘れてはならない」と語った」と報道した。8月6日の被爆状況を詳細に展示している本館を訪れたのかどうかはわからないが、東館に集められた遺品や企画展は見た様である。しかし、バイデン大統領については、何を見たのかは明らかになっていない。何を見たのかについても「軍事機密」なのであろう。

G7首脳が原爆資料館を訪れたこの日、G7首脳は、「核軍縮に関するG7首脳広島ビジョン（広島ビジョン）」を発表した。

我々は、2022年1月3日に発出された核戦争の防止及び軍拡競争の回避に関する五核兵器国首脳の共同声明を想起し、核戦争に勝者はなく、また、核戦争は決して戦われてはならないことを確認する。我々は、ロシアに対し、同声明に記載された諸原則に関して、言葉と行動で改めてコミットするよう求める。我々の安全保障政策は、核兵器は、それが存在する限りにおいて [for as long as they exist]、防衛目的のために役割を果たし、侵略を抑止し、並びに戦争及び威圧を防止すべきとの理解に基づいている。
（外務省ホームページから）

核戦争に勝者はいないとしつつ、「それが存在する限り」防衛のために必要だと述べているのである。ロシアに対しては牽制しつつ、G7国側は「防衛目的のために役割を果たすとしているのである。「それが存在する限り」と言う文言は、2022年1月3日にアメリカ・イギリス・フランス・ロシア・中国で出された「核保有5カ国声明」を引き継いでいる。

我々は、核戦争に勝者はなく、決してその戦いはしてはならないことを確認する。核の使用は広範囲に影響を及ぼすため、我々はまた、核

兵器について——それが存在し続ける限り [for as long as they continue to exist]——防衛目的、侵略抑止、戦争回避のためにあるべきだということを確認する。我々は、そうした兵器のさらなる拡散は防がなければならないと強く信じている。

(『朝日新聞』2022年1月4日)

核保有5カ国声明の時は、5カ国の核保有は「防衛目的、侵略抑止、戦争回避」のため必要とする一方で、核拡散を防がなければいけないとしているので、5カ国声明が「私たち」を棚に上げて、「核拡散」を批判しているのに対して、広島ビジョンは、「私たち」を棚に上げて、ロシアを名指しで批判しているのが特徴である。このような国々が「それが存在している限り」必要、としている、ということは、永遠に核兵器は必要だとする宣言に等しい。核戦争の現実を見ることはいまだに軍事機密扱いで、核廃絶ではなく核存続のためのビジョンを提供する「広島ビジョン」だといえる。「5年間で防衛費を現行計画から1.6倍の43兆円に拡大すると閣議決定」する日本政府、「核抑止」なるものの増強をしようとする英仏や、米承認による英仏によるF16のウクライナ供与、513億円もの米によるウクライナへの武器提供の商談成立、そうした到達点(サミット)としての広島ビジョンであった。2019年11月24日、広島を訪問したローマ教皇は全く反対のビジョンを提供している。

紛争の正当な解決策であるとして、核戦争の脅威で威嚇することに頼りながら、どうして平和を提案できるでしょうか。そして「神に向かい、すべての善意の人に向かい、一つの願いとして、原爆と核実験とあらゆる紛争のすべての犠牲者の名によって、声を合わせて叫びましょう。戦争はもういらない！兵器の轟音(ごうおん)はもういらない！こんな苦しみはもういらない！」と。

(教皇フランシスコ広島平和記念公園でのスピー



アメリカ歴史博物館(ワシントンDC)の展示風景
(写真撮影:高橋博子、2020年2月17日)

チ、『朝日新聞』2019年11月24日の記事より)

核戦争の脅威で威嚇する国々が語る「平和」そして「広島ビジョン」。それがG7広島サミットだった。このG7を迎える日本・広島県・広島市は、広島に住む人々に沈黙を強い、原爆を使用した国を許すべきとし、批判や告発は良くないことだとしていた。広島市では交通規制が敷かれ、広島県立・市立の多くの学校が休校になった。日本国・広島県・広島市は、充分な出張費が出て政府専用機などで移動するような世界中のG7サミット取材する報道陣に対しては、サミット開催場所である広島プリンスホテルからは離れているものの、国際メディアセンターに充分な設備を用意し、豊かな食事を振る舞った。その一方、世界中の手弁当で集まるNGO関係者・市民に対しては不十分な設備しか用意せず、水すら提供しなかった。

しかし、こうした首脳陣、国々、報道陣、NGO関係者、市民に対して、はっきりと声を上げて叫ばなければいけないと思う。「こうした戦争はもういらない！兵器の轟音(ごうおん)はもういらない！こんな苦しみはもういらない！」と。

沖縄 慰霊の日 那覇教区 平和巡礼

沖縄「慰霊の日」にあたる6月23日（金）、長くコロナ禍で中断していた那覇教区平和委員会主催の「平和巡礼」が4年ぶりに開催された。正義と平和協議会は委員他11人この平和巡礼とともに参加し、ともに祈り歩いた。

朝6:00、早朝にもかかわらず日が照り蒸し暑い中、カトリック小禄教会の庭での野外ミサが始まった。那覇教区の押川壽夫名誉司教、ウェイン・バートン司教はじめ5人の司教の共同司式のミサ、説教はさいたま教区名誉司教の谷大二司教が担当した。教区内外の司祭、信徒約150人が参加した。ミサ後、小禄教会の信者さん手作りの朝食をいただき、7時15分過ぎに教会を出発。沖縄県南端の糸満市にある平和祈念公園内の「魂魄の塔」まで、約15キロの「平和巡礼」に参加した。

巡礼にあたり「沖縄戦から観想する十字架の道行き」のプログラムが渡された。これは十字架の道行の15留に合わせて、沖縄の苦難の歴史と現在の世界の痛みを祈っていくように導く「道行き」である。暑い暑い中、汗だくになりイエスの受難と平和への思い、厳しい現実と忘れてはいけない歴史を思い起こし約4キロの道を歩いていく。途中のスポットで、3留ずつ朗読、祈り、黙想、歌を歌い、つかの間の休息。休憩所には冷たい水の用意があり、巡礼を支えてくださる人の祈りも合わせて、再び歩き始める。私が歩いている横で、カトリック新聞の取材に応じてご高齢にもかかわらず毎年参加している沖縄戦体験者の語る声が聞こえてきた。78年前、この地で何が行われたのか、逃げ惑う人びとの叫びが聞こえ、沖縄戦の犠牲の中で軍隊は民衆を守らないという事実をかみしめながら歩いていく。



6月23日朝6:00、カトリック小禄教会の庭での野外ミサ。写真中央は司式するウェイン・バートン日本カトリック正義と平和協議会会長、右は森山信三大分教区司教。

約4時間半の巡礼の最終地点「魂魄の塔」に到着したのは12時過ぎであった。最後の祈りをささげ、ウェイン司教が平和メッセージ「大国の狭間からの叫び」を読み上げた。また、同日付けの正義と平和協議会声明文「沖縄慰霊の日にあたり」を発表した。参加者一同は静かに塔の前に集い、黙とう、献花、千羽鶴の奉納を行い平和への誓いを新たにす。

平和メッセージはカトリック那覇教区 ホームページ →<http://www.naha.catholic.jp/>

正義と平和協議会声明文「沖縄慰霊の日にあたり」正義と平和協議会ホームページ
→<https://www.jccjp.org/archives/3006.html>

平和巡礼の後に宮古島を訪れた。美しくどこまでも透き通った海、限りなく青い空がひろがる宮古島。しかしそこには自衛隊駐屯地が存在し、弾薬庫の建設が進められている。宮古島平良教会の信徒からは教会生活の中で基地反対の声を上げることの難しさを伺った。それでも現地に足を運び、現状を知っていくことが励みになると、逆に励まされた。私たちががすること、できることはあるはずだ。「絶対あきらめない」この気持ちがこれからの巡礼の始まりだ。

（日本カトリック正義と平和協議会事務局）

きみはヒロシマで何も見なかった。何も。 ——G7という「こわばり、をほぐすために

● 川本隆史（広島司教区信徒 東京大学および東北大学名誉教授）

【1】被爆・敗戦から6年後の広島に生まれ育った私は、1965年のクリスマスイブにカトリックの洗礼を受けている（当時は中学二年生）。大学へ入学する1970年4月に郷里を離れ、法学部から文学部に転じて大学院へ進み、アメリカの哲学者ジョン・ロールズの『正義論』（原著1971年）と出会って、探究目標を社会正義（＝社会のまともさ）へと切り替えた。1980年に就職した女子大学で女性学・フェミニズムの活発な展開に目を開かれ、心理学者キャロル・ギリガンが『もうひとつの声で』（原著1982年）で首唱した「ケアの倫理」に強い衝撃を受ける。以来、正義とケアを兼ね備えた社会の構想をライフワークと定め、四つの大学に通算42年間奉職して昨年3月末をもってリタイアしている。

学部・大学院および教員生活の前半を合わせて25年間ほどは、ヒロシマを正面から論じることをなぜか避けていた。しかし幼馴染を介して「被爆二世教職員の会」メンバーとの交誼を賜ったのをきっかけとして、「唯一の被爆国日本」という常套句へと集約されがちな個々の被爆体験の検証と継承を《記憶のケア》という観点から進める作業に着手している。「記憶」なるものを脳に注入された情報の集積物だと見限って操作の対象に割り振るのではなく、種々の記憶をいわば「生き物」のように見立てて、これを注意深く世話し手入れする営み（ケア）を「記憶のケア」と名づけてみた。とりわけ「被爆」のような痛苦な経験が負わせた、辛い記憶であればあるほど、固定観念や心的外傷へと変質して当事者を縛ったり沈黙を強いたりする傾向がある。そうした記憶の一つひとつに向き合い、本人の記憶に歪みや欠落がないかどうかを丁寧^{ケアフル}に点検し、歪みが見つければそれをほぐし補正を求めるところに、「記憶のケア」の眼目がある。

被爆建物だった生家（爆心地より3キロ弱）

を改築して、生活の拠点を東京から当地へ移した私に、G7広島サミットの現場レポートが求められた。もとより戦争や核兵器をめぐる国際情勢へと立ち入った論評が期待されている訳でもあるまい。ごくごくパーソナルな所感を綴ることを了とされたい。

【2】実はこのイベント開幕直前の5月15日より20日まで、私は広島を離れて、東京に滞在している。2万4000人の警察官を動員する厳戒態勢と行政が演出する歓迎ムードに息が詰まって、脱出しただけではなかった。G7を現地で迎えることよりも、私にとってははるかに大切な集まりに臨むほうを選んだという、もっと積極的な理由がある。敬愛してやまない哲学者の花崎皋平さん（1931年生まれ）が若き日に携わった、学生サークルの詩誌『ぼくたちの未来のために』全36冊の復刻版（琥珀書房）刊行記念シンポジウムに何としても参加したかったのだ。

10代の花崎さんがプロテスタント教会に通い詩作に打ち込んでいたという前歴は、かねてより聞き及んでいた。だが上智大学を諦めてしぶしぶ東京大学へ入った当人が、朝鮮戦争に反対する「キリスト者平和の会」（1951年2月発足）や松川事件裁判闘争のキリスト者救援グループに深く関与しつつ、同誌創刊号（1952年11月5日）に詩作品「空へ」を寄せ、その中でヒロシマを詠っておられたという真実は、自伝『生きる場の思想と詩の日々』（藤田印刷エクセレントブックス、2022年）と復刻版によって初めて読者に明かされたのである。「空へ」には「廢墟となった記念館／あの空の激しさを吸いつくすドームの瓦礫」、「一九四五年のこの月の廿四万七千の魂の記憶の絶えぬうちには」といった被爆都市を示唆する詩句が読めるではないか！

「カトリック正義と平和広島協議会」の立ち

上げに高校の恩師（倉光誠一・西尾禎郎の両先生）が尽力された経緯については、証言が残っている。それでは——第二バチカン公会議が標榜した「現代化」に10年以上も先立つ冷戦初期だとはいえ——朝鮮戦争に対してカトリック教会はどのようなスタンスをとっていたのか、この辺りはきちんと解明さねばなるまい（この精査は、本誌240号の論説「1920年代の日本カトリック教会」でSr.三好千春が指し示した教会の「記憶」の再検討にも通じるだろう）。

G7初日の5月19日に開催されたシンポジウムの本番、復刻の労をとられた田口麻奈さん（明治大学文学部／日本戦後詩の研究者）の基調報告を受けてのコメント役を務めた。その前口上に私が持ち出したのが、G7参加のため広島に集まる各国首脳が慰霊碑に献花し平和記念資料館を視察するとの報を聞いて直ちに想起した、フランス映画の冒頭シーンだった。

ホロコーストを告発したドキュメンタリー映画「夜と霧」（1955年）で名を馳せたアラン・レネ監督作品「ヒロシマ・モナムール」がそれである（作家マルグリット・デュラスが書き下ろしたシナリオをもとに広島ロケを実施し、1959年に公開／日本上映にあたって「24時間の情事」という不穏当な邦題が付されてしまった）。出だしの男女の科白に込めた真意を、デュラスは以下のように説き明かしている（『ヒロシマ・モナムール』工藤庸子訳、河出書房新社、2014年、8ページ）。

ふたりは何を話しているのだろうか？ ほかならぬヒロシマのことを。

女は男にヒロシマですべてを見たと言う。女が見たものが映し出される。それは恐ろしいものだ。しかし一方では男の声が否定的に響き、一連の映像を偽りのものだと決めつける、男は没個性的な声で、執拗に、きみはヒロシマでも見なかったとくり返す。

ふたりの最初のやりとりは、そうしたわけで寓意的なものとなるだろう。〔中略〕ヒロシマ

について語ることは不可能だ。できることはただひとつ、ヒロシマについて語ることの不可能性について語ることである。ヒロシマを理解することはのっけから、人間精神が陥る典型的なまやかしとして、ここに定立されている。

広島を訪れる先進国首脳陣がフェンスに囲まれた平和記念公園を見学し、そこに分不相応のメッセージを書き残したとしても、私（たち）もまた「きみはヒロシマで何も見なかった。何も」と呟き続けねばならないのではないか。トップ会議に付き物の「こわばり」をほぐし、その「成果」に過度の期待も絶望感も抱かず、「ヒロシマについて語ることの不可能性について語ること」を対抗的に打出す——そこから、正義と平和への突破口が開かれるものと私は信じたい。

【3】花崎さんは、田中正造の日記（1909年8月24日）の一節をよすがとしながら正造が生き抜いた「百戦百敗」の思想こそ、今日、私たちが堅持すべき思想ではないか（『ピープルの思想を紡ぐ』、七つ森書館、2006年、iiページ）と呼びかけた。その彼が学んだ民衆思想のポイントは、次の三つにまとめられている（『田中正造と民衆思想の継承』、七つ森書館、2010年、第13章）——①人間存在の基底に立つ（人間本来無一物の基底に身を置いて、一身独立の人民＝ピープルとして生きることを目指す）、②いのちを中心としたサブシステムの思想（生存を維持する営みを基本に据える生活と生産、再生産様式を第一義とすること）、③永遠、悠久を想う靈性（自分のいのちの短さと受け継がれてゆくいのちの限りなさを想う感覚）。

こうした境地にいたる道程を人びととの「協道性」（サレジオ会の阿部仲麻呂神父が「シノグリティ」に与えた絶妙の訳語）を手引きに歩んでいくとしよう。ちなみに、花崎さんの上掲自伝570ページに下関労働教育センター（公教要理を教わった林尚志神父の活動拠点）訪問の記述を見つけ、二人の師の「協働＝協道」から鼓舞されている私なのである。

報告：星のようにきらめいた先住民たちのストーリー ～海と川に生きる先住民たちの国際シンポジウムから～

市川利美（北大開示文書研究会会員）

1 世界の先住民はいまだに闘っている

2023年5月26日から28日の3日間、北海道東部の浦幌町^{うらほろちょう}で、国際シンポジウム「先住権としての川でサケを獲る権利」が開催された。

主催者はラポロアイヌネイション。北海道大学先住民・文化的多様性研究グローバルステーションと北大開示文書研究会（文書研）が共催した。私はアイヌ先住権の闘いを支援するNGOである文書研の一員として企画・準備・運営に関わった。

シンポジウムの最終日、ラポロアイヌネイションの差間正樹^{さしままさき}会長はこう語った。「この国際シンポジウムを開く目的は世界の先住民がすでに先住権を獲得し自然保護にも積極的な役割を担っている。だからその状況を教えて欲しいということだった。しかし、私たちは少し誤解していたのかもしれない。なんと世界の先住民はいまだに一生懸命闘っている。そして、その姿に本当に感動した」。

2 先住権は国家よりもはるか昔から

先住権というのは先住民族が伝統的に使用する土地や資源に対してもつ権利をいう。わが国では憲法に規定がないばかりか、2019年のアイヌ新法でも無視された。明治になって理由なく奪われた漁業権を回復しようと、2020年ラポロアイヌネイションは初めての先住権訴訟を提訴したが、国は請求を否定もしくは無視し続けている。

参加ゲストの国々の先住権規定はどうか。台湾、カナダ、フィンランドは憲法に盛り込むことに成功している。オーストラリアでは憲法に規定はないが「マボ判決」や「先住権法」がある。アメリカ合衆国には連邦政府とトライブの間の条約や法規範化された判例がある。これらの国々と日本との差は歴然としている。



浦幌十勝川の堤防でゲストを案内するラポロアイヌネイションスタッフ（撮影：浅野由美子）

しかし、サーミ評議会議長であるアスラック・ホルンバルグさんは、「フィンランド憲法の先住権規定は文化の権利に特化している。」「サーミには自治権・統治権はなく、水や土地など自然資源に対するサーミの集団的権利も認められていない。その意味ではアイヌと共通性がある」という。

カナダのハイダネイションの世襲チーフであるラス・ジョーンズさんは、「カナダでは1982年の憲法改正で先住権が規定されたし、先住民と政府の協定もある。しかし、大切なのは、それによって先住民の権利が作られたということではなく、そういったものは以前から存在しており、そのことをカナダ政府が認め、ここに明記するという形であるということだ」と強調する。先住民には元々の慣習や生き方から生まれる生来の権利があるということは、闘う先住民の共通の認識となっている。

3 醜い法とその執行者への挑戦

台湾では2000年に憲法に原住民の権利が盛り込まれ、2005年には原住民族基本法が制定された。

しかし、基本法が原住民に伝統的海域で魚を捕ることを認めているにもかかわらず、魚3尾

とイセエビ3尾を捕獲したアミ族の男性に罰金が課された。アミ族のアモス・リンさん自身も許可証の申請がないことを理由に銚^{もり}を没収された。「銚はアミ族の生活、文化、祭事に使われるもので、規制する必要はない。これはアミ族の日常生活に対する嫌がらせだ」とアモスさんはいふ。また、タオ族のマラオスさんによると、近年、海上保安庁と蘭嶼島^{らんしよとう}島民との衝突が多発しているという。

台湾では憲法や基本法があっても法の執行者たちに法の理念が浸透していない。台湾原住民たちは不断に闘い続けている。

オーストラリア・サウスコーストのダニー・チャップマンさんは海洋に生きるワルブンジャ・クランの先住民である。ダニーさんの講演では、アワビをとっていた74歳の男性が水中で監視員に激しく追いかけられるようすが上映された。男性は尋問・警告を受けたのちアワビと漁具を押収されたという。

サウスコーストの漁民は1994年までは自由に魚を捕っていた。しかし、1994年、ニューサウスウェールズ州が漁業管理法を制定させてからは30年間で500人が起訴されたという。その多くは男性である。「私たちは貧しいから、逮捕されると家族は困窮する。監視員たちは顔を黒く塗ったり樹木のようにカモフラージュして私たちを監視する。彼らとの闘いはとても汚く不公平である」とダニーさんは憤る。

サーミのアスラックさんによると、2017年以降、フィンランドでは先住民のサケ漁の漁期や漁法が強く規制されるようになった。そこで5人のサーミが法で禁止されている伝統的な漁法でのサケ漁をあえて行い、それを自ら撮影して警察に申告した。最高裁は「彼らは、法律は破ったが罪は犯していない」と判示し、サーミの大勝利となった。サーミの人々は自分たちの先住権を侵害する国内法に対して「密漁」と裁判という手段で挑戦し続けている（判決後は捕まることがなくなったという）。

各国の先住民たちは時として捨て身で先住権のために闘い続けている。



シンポジウム2日目、車座トークの風景（撮影：浅野由美子）

4 資源保護名目の先住権剥奪は許されない

サウスコーストの先住民に対して州政府は、アワビは一日2個、ロブスターは2尾という制限を課し、もし3匹以上捕獲した場合は有罪だとする。しかし、弁護士のキャサリン・リッジさんは、「アワビは、年間100トンの水揚げ高がある商業ビジネスに対して、先住民の漁獲は年間1トンにもなっていません。商業捕獲についてはさらに30トン増やすと言っていることから考えても、漁業資源の枯渇は先住民の捕獲を規制する理由にはなりません」と断言する。

フィンランド政府は2021年、サーミが何千年も大切に共生してきたデットヌ川とその支流におけるサケ漁を全面的に禁止した。全面禁止は歴史上初めてのことであり、しかもサーミの権利者は一切同意していない。禁漁の理由は北極圏を中心とするサケの個体数の激減だという。

だが、「サーミの伝統的な技術や知識は自然と深く結びついており、漁が出来なければその伝統は消滅してしまう。自然保護が先住民族の権利を剥奪するための道具として使われることは許されない。持続可能な漁業を行い、サケなどの資源を次世代に残すことが重要である」とサーミは主張する。

北海道の川では長年、遡上するサケを必要数を超えて一網打尽に捕獲する孵化増殖事業が行われている。非先住民による過去のとりすぎこそが資源枯渇の元凶といえよう。資源保護を理由にアイヌのサケ捕獲権を奪うことは許されないと私も思う。

台湾のセディック族出身の法学者アウェイ・

モナさんも、「自然資源を国が使おうとする際、生物多様性の深い知識をもっている原住民の由来の知恵にのっとって行われるべきで、原住民へ事前に相談し、じゅうぶんな情報提供をして原住民がそれを決定するのでなければならぬ」と主張する。

5 ストーリーを語り続けよう

「ここに来ている先住民のゲストの皆さん、そしてアイヌの皆さんに一つ伝えたいことがあります。私たちのストーリーは決して終わってはいません。そしてあなたたちのストーリーも語り終わってはまだいないでしょう。これから

も私たちは闘い続けていく必要があります。私たちはお互いに連帯していく必要があります。今回の話を私は自分たちの仲間を持ち帰って共有していきますし、また世界にも伝えていきたいと思っています。私は少し感情的になっていますけれども私が皆さんに伝えたいことはこの闘いを続けましょうということです。ぜひこれからもつながっていければと思います」。

ダニー・チャップマンさんの言葉が胸にしみる。今後、この国際シンポジウムで得られた共通の認識を共同のステートメントとしてまとめあげ、共に連携して闘いを続けることができたらどんなに素晴らしいことだろうか。

JPブックレット Vol.11 正義と平和講演録『恐れではなく、愛の世界を！ 2022年2月、ロシアによるウクライナ侵攻以降の日本の軍拡政策と平和』の発行

中野晃一「ウクライナ戦争以降の日本の軍拡をめぐる政治と憲法について」

布施祐仁「台湾をめぐる米中両立と日本の軍拡」
クロストーク「あなたたちの方がずっと甘いよ」

本講演録は、2022年12月7日、カトリック司教協議会社会司教委員会主催の「司教のための社会問題研修会」の記録です。

2022年2月、ロシアによるウクライナ侵攻以降、日本国内でも「外国からの攻撃を抑止するためなら、ある程度の軍備は止むを得ない」という世論が多数派を占めるようになりました。しかし、軍備増強の根拠である「抑止」で戦争を回避することは本当に可能なのでしょうか。私たちが平和に生きるための真のリアリズムとはなんのでしょうか。

タイトルの「恐れではなく、愛の世界を！」は、1962年10月に起こった「キューバ危機」を背景に発布された、教皇ヨハネ二十三世の回勅『パーチェム・イン・テリスー地上の平和』（1963年4月11日公布）の一節に依拠するものです。「キューバ危機」では、ソ連が米国によ



るキューバ侵攻を「抑止」するため、米国に到達可能な中距離弾道ミサイルをキューバに配備し、世界はたちまち核戦争一触即発の危機に陥ったのです。これはまさに、ウクライナ戦争を取り巻く現代世界、米中対立の激化する現代東アジアの姿です。

回勅は、「抑止」とは「恐怖の法則」に他ならないこと、唯一絶対の平和の道は「愛の支配」であることを示すために、今から60年前に記されました。

小教区とジェンダー

栗田隆子 (文筆家)

カトリックのとてつもない世界規模の性暴力や性虐待、その隠蔽などの悪について私はおりに触れ何度も取り上げてきた。他方で、解放の神学をはじめカトリックがさまざまな社会運動の後ろ盾となってきた歴史についても振り返っている。たとえば今も、カトリック教会内部の改革のため女性司祭実現化に向けてローマでずっと動いている人々や、同性愛者などのセクシュアルマイノリティの権利擁護に動く聖職者がいることは事実だ。

さらに性暴力の話ではないが、ホームレスの人々を排除するために設置された、日本語でいうところの「排除アート」や「排除ベンチ」といったものを「敵対的建築物」と呼び、それらの設置を禁止しようという法律がブラジルでは生まれようとしている。その法律の名前にホームレス状態の人々の排除に反対し、そのようなベンチや建築物を壊した神父の名前が名付けられたと聞く（ランチェロッチェ法）。

ホームレスに対する排除反対活動をしている日本人の神父の知り合いもいるので、ついつい日本でも排除ベンチや排除アートを神父がぶっ壊していただいてもよろしいのに…と皮肉めいて呟いてしまうが、世界的な活動をしている聖職者や信徒の話聞いて胸を踊らせた後に自分の所属する教会に戻ってくると、落差を感じてしまうのも正直なところだ。とはいえ、そもそも高齢化著しい小教区に対して勝手な期待するのはむしろ迷惑かもしれず、また今までやってきたことを維持するのに精一杯であることを単純に非難する気にはなれない。というのも私自身は鬱のおかげで朝のミサにもなかなか出られないので、そもそも今の自分の所属教会や小教区にほとんどコミットできていないからだ。

とはいえ、最近私は小教区とか個々の教会に対してどう向き合おうかと考えるようになって

きた。まず私はカトリック信徒ではあるものの、カトリック教会におけるジェンダーの不平等や差別についての変革をどこか諦めてしまっており、洗礼を受けて以後30年近く何もせず、何かをしようとさえ思えなくなっていた。しかし数年前からカトリック教会のハラスメントや性暴力や性虐待に向き合うべく教会に関わるようになった。それは、以前も書いたように思想の左右を問わず起こるハラスメントなどに社会構造の根源を見たからでもあるが、同時に自分のカトリック教会に対する諦めもまた性虐待や性暴力の隠蔽に繋がっていたと考えるからだ。

現在私は、オリエンズ宗教研究所出版の『福音宣教』でフェミニスト神学についての連載を行なっている。教皇フランシスコも折々批判している「聖職者中心主義」やハラスメント、あるいはその隠蔽といった問題はむしろ小教区に目を凝らしている方がよく見えてくるのではないかと思えてきた。悪にばかりこだわっていると絶望してしまうかもしれないが、私自身がカトリック教会に再びコミットを始めた理由は何か良いことをなそうというよりも、性的な虐待や暴力を少しでもなくしたいと思う気持ちからなので、大きな偉大な動きよりもしょぼい、みみっちい人間の姑息さや悪といったものに向き合う力を神がくださるよう祈りたい。

考えてみれば小教区という存在は不思議だ。カトリック教会は信徒の一人一人が教皇や司教、司祭を選任するなどといった権限を持つこともないし、ましてや女性は多くの権限ある立場から遠ざけられている。だが教会の信徒は高齢女性が非常に多い。その意味について深く考えることは教会のジェンダー問題を考える意味でも重要ではないかと、そんなことを最近考えている。



小さな島の声に耳を傾ける

市田真理 (第五福竜丸展示館学芸員)

日本から4000km離れたマーシャル諸島共和国。第五福竜丸展示館で仕事するようになるまで、私はその存在さえ知りませんでした。

核実験場となったマーシャルのビキニ環礁とエニウェトク環礁、そして第五福竜丸と同様「死の灰＝放射性降下物」をあげたロンゲラップ環礁。取材を重ねてきたジャーナリストや研究者からの情報で、知識を得てきたもののやはりわからないことだらけ。6年前、初めてマーシャルを訪れることができ、英語を話せない私はウクレレとスケッチブックと親切な仲間たちのサポートのおかげで、マーシャルの人たちと交流することができました。風に吹かれて、花を見上げて、歌うこともできました。

近年は、若い友人たちが次々にマーシャルに関する論文を発表したり、映画やマーシャル語辞典を作ったりしていますし、コロナ禍ではオンラインで交流するようになり、かなりの覚悟をしなくては行けそうになかったところが、ぐっと身近になりました。ありがたいなあ。友人たちに感謝です。

1945年から1984年までアメリカの統治下にあったマーシャルでは自国の歴史を学ぶ教育カリキュラムがなく、アメリカの教科書が使われてきたといえます。そのためアメリカの核実験による被害は、被ばく当事者以外からは遠く、見えないものにされてきました。1914-1945年、日本が「南洋群島」として支配し、日本の戦争に組み込んでいったことを私たちが学ぶ機会がないように。

この春、日本の研究者の招聘で来日されたエヴェリン・ラルホさんもまた、アメリカの大学に留学して初めて、自分の母や叔母たちが受けた核実験被害について学ぶ端緒につきます。

被害とは、被害者が苦しんでいるさなかには、なかなか理解されず周知されず、忘却されかけ

ながらも、声を上げ続ける人と耳を傾ける人がいて、初めて歴史のなかに位置づけられるのだと思います。

エヴェリンさんの来日中、この国は先進国首脳会談＝G7のさなかでした。広島に滞在していたエヴェリンさんの目には、生活インフラまで規制する警備や、連日の報道はそうとうに異様だったようでした。東京のホテルに着いてテレビをつけるなり「またG7」とうんざりした声。そして「G7やってるなんて、知らなかったし」と言うのです。

被爆地広島での開催は、あたかも核におおわれた世界についての指針を議論するかのよう演出されていました。しかし被ばく当事国であるマーシャルや、ヒバクシャの声に耳を傾けることなく、核について議論してもいいものなのでしょうか？

マーシャルの元外務大臣トニー・デブルムさん（故人）は「核実験被害も気候変動も大国から押し付けられたもの。大国のエゴだ」と言います。またマーシャル諸島共和国国家核問題委員会（NNC）のアルソン・ケレンさんは「気候変動は生存のための闘いを私たちに強いる、もうひとつの核実験だ」と言います。

フィジーやパプアニューギニア、マーシャルなどが加盟する太平洋諸島フォーラム（PIF）は、福島第一原子力発電所から放出されようとしている「汚染水（ALPS処理水）」について深い懸念を表明しています。南太平洋非核地帯条約（ラロトンガ条約）は、太平洋地域が放射性廃棄物や放射性物質による環境汚染のない状態を保つことを確認しています。

聞こえないから問題がないのではなく、真摯に耳を傾けるべき声に気づけないでいると、＜私たち＞は太平洋でつながるたくさんの友人たちから見捨てられてしまいます。

特集 広島G7サミットと核廃絶

- 1 ビジョンなき「広島ビジョン」：
G7広島サミットと核兵器廃絶 高橋博子
- 4 沖縄 慰霊の日 那覇教区 平和巡礼
- 5 きみはヒロシマで何も見なかった。何も。
—G7という「こわばり」をほぐすために 川本隆史
- 7 報告：星のようにきらめいた先住民たちのストーリー
～海と川に生きる先住民たちの国際シンポジウムから～ 市川利美
- 9 JPブックレット vol.11正義と平和講演録
『恐れではなく、愛の世界を！ 2022年2月、ロシアによるウクライナ
侵攻以降の日本の軍拡政策と平和』の発行
- 10 (新連載)話してみようか、「ジェンダー」のこと
小教区とジェンダー 栗田隆子
- 11 (連載第7回)からし種、パン種、空の鳥
小さな島の声に耳を傾ける 市田真理
- 12 まんが 連載第13回「神学生トマス」

表紙写真 2023年6月23日（沖縄慰霊の日）魂魂の塔の前
日本カトリック正義と平和協議会委員会は、2023年6月23日（沖縄慰霊の日）
の那覇教区平和巡礼に参加しました。



編集後記

福島第一原発のアルプス処理水海洋放出が、国際問題となっている。国は、海洋に放出しようとしている水の放射線量は十分に希釈されているのだから大丈夫だ、という説明を繰り返している。しかし、海洋に投棄して希釈しようとしている汚染水を、事前に希釈し、それを安全の担保とすることに、いったい、どんな意味があるのだろうか。意味があるのは、むしろ、いつまで投棄をつづけるのか、によって積算される、汚染水に含まれる放射性物質の総量だ。

「30年程度かけて放出する」と政府は言う。しかしこの30年とはどこから弾き出された数字だろうか。それは当初予定していた廃炉措置終了の2051年のことではないのか。しかしながら、廃炉工事が大幅に遅れ、いつ廃炉が完了するのかわからない。廃炉工事開始当初、使用済み核燃料の取り出しは2021年終了を予定していたが、1号機、2号機は未だ工事が開始すらしていない。デブリの取り出しは、その方法すら定まっていない。廃炉が完了しない限り、地下水は流れ込み、汚染水は増え続ける。

仮に廃炉に100年かかったとしたら、汚染水は100年間生成され、海に廃棄され続けることになる。100年後の海はどれほど汚れることだろう。私たちは子孫に、いったい何を食べて生きていけというのだろうか。

今回の海洋放出には、中国や韓国、それから、マーシャル諸島をはじめとする太平洋の島々が反対している。マーシャル諸島はかつての核の実験場だったのだ。

だからもういいのか。太平洋なんてもういいのか。どうしてそんな判断が、太平洋の島国である日本にできてしまうのか。核兵器に依存する主要先進国（G7）と、小さな単位で世界中に散らばるように生きている先住民たちとのほごまに立ってみよう。核（放射能）の問題は、日本という核被害国の傲慢な無責任さを、くっきりと炙り出している。(h.)